

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

罪びとの招待

――マルコ伝第2章13～17節――

1964年5月31日

小池辰雄

そのまま吞んでいく 私について来なさい 罪びと 罪 神からの離反 我執 義人なし一人
だになし 根本的な欠陥 砕けたる魂 聖霊のご馳走

【マルコ2・13～17】（私訳）

¹³ イエスはまた湖畔に出て行った。すると、群衆が皆みもとに來たので、彼は彼らに説教した。¹⁴ それから、道すがら、アルパヨの子レビが収税所に坐っているのを見て、『私について来なさい』と彼に言うのと、立って彼に従った。¹⁵ イエスがレビの家で食卓に横座してついていると、多くの取税人も罪びとも、イエスや弟子たちと共に横座していた。というのは、多くの人々がそこにいて、イエスに従っていたからである。¹⁶ パリサイ派の学者たちは、イエスが罪びとや取税人と食事を共にしているのを見て、弟子たちに言った『なぜ、あの人は取税人や罪びとたちと食事を共にするのか』¹⁷ イエスはこれを聞いて彼らに言う『健康な者には、医者是要らない。要るのは病人である。私は義人をではなく、罪びとを招くために來たのである』

●そのまま吞んでいく

¹³ イエスはまた湖畔に出て行った。すると、群衆が皆みもとに來たので、彼は彼らに説教した。

イエスはカペルナウムを中心として湖畔で伝道しておられたわけですが、もうイエスの名が非常に行き渡っているのです、すぐ群衆が非常に集まってくるわけです。そうするとまた、イエスは道を説かれた。道を説いて、また動く道すがら、アルパヨの子レビが――マタイのことです――収税所に坐っているのを見て、

「私について来なさい」

と。何も問答をしないで、いきなり「私について来なさい」と。こういうところが非常に、信仰の世界の大事な気合です。

私はいつか、藤井武先生の校正のお手伝いをしていた。印刷所に参りまして、そこで校正をしていました。そうしたら、矢内原先生がやって来て、



「小池君、ちょっと来てくれないか」

とおっしゃるので、何のことだか分からないけれども、

「はい」

と言つてついでに行きました。急いでおられるので、その当時としては珍しいですが、自動車に乗せられて行った。そうすると、先生が

「妹の子どもが亡くなつたので、その葬式の司式をしてくれ」

と、いきなり頼まれた。私は行つて、すぐそこで司式をいたしました。そんな時にでも、

「なぜですか？ どういうことですか？」

と訊^きかないで、私はただ「はい」と言つてついでに行きました。なにも、それが自分が信仰的であつたと言つて、今皆さんの前に誇るのでも何でもありません。ただ、信仰の世界はそういうような気合でもつて――「気合」という言葉が適切か何かは知りませんが――心と心、魂と魂の、ウワツとした触れ合いで進んで行く。何かものが分かつたり、説明されてから、「それでは」というのではなくて、相手を信じて進んで行くときに、初めてそこに展開していくところの世界が自分の身についてくる。

藤井先生のところへ、私は聖書について、

「こうでしょうか、ああでしょうか？」

と訊^きいたことがない。先生の話をお聴いて、とにかく毎回、何か私は満たされて帰つてきました。それをとにかく、自分の生活で咀嚼していくという、そういう態度でした。ひとつは先生がおつかになかつたという面もありますが。何しろ、ヘタなことを訊^きくと、怒られそうだから。別に、いきなり怒る先生でもないんですが。内村先生はもつと凄かつたでしょうけれども。とにかく、余り問答をしないでいた。今の若い方は、ちよつとそういうところが、見当がおつきにならないかもしれないかもしれませんが。そんなことをして、私は私なりに育つてまいりました。決して、それがいいというのではありませんけれども。ある時は大いに語り合つていい。しかし、ある時は本当に、

「そのまま呑^のんでいく」

というこの両面が非常に大事なことです。大事なことは「そのまま呑^のんでいく」ということ。この気合のないときには、語り合いで何とかしていくというのが主であるときには、それは信仰の世界には入れない。信仰の世界は呑^のんでかかる世界です。時々、引用する句ですが、

“No reason why, but to do and die.”

「何故にと理由づけることなしに、ただ行つて而して死するのみ」

という。信仰の世界はやはり行爲的である。行動的である。もともと存在的なんです。存在は、ただ在るということではなくて、動的な存在――動^{うご}、在^あ、とでも言いましょうかね――動的に存在するというようなのが、この信仰の本当の性格であると思います。



●私について来なさい

¹⁴それから、道すがら、アルパヨの子レビが収税所に坐っているのを見て、『私について来なさい』と彼に言う、立って彼に従った。

イエスがアルパヨの子レビに——収税人ですが——

私について来なさい

と言われた。何もその前後に書いてない。ただ「ついて来よ」と。何も収税人に限らず、他の場合もイエスはその調子です。その人の本質、存在をグッと見て、「ついて来い」と。イエスは神さまにそう言われていて生きていた方です。

「来たれ」、「行け」

と。「来たれ」とか「行け」とか、そういう神の命令といいますが、ちょうど、百卒長のようなああいう信仰を非常にイエスは評価される。日本でも昔の軍隊は、命令一下という。そこでグズグズしていたら、負けです。命令一下、直ちに行動に移る。これは信仰の角度です。信仰の世界では軍隊的な命令一下で行動に移るということが、内面的にもっと信愛の関係である。恐ろしいのではなくて、もっと信愛して語る。言うことの奥に深い信と愛とが含まれているわけです。

私たちにも、この収税人と同じように、「ついて来よ」と言われている。自分が今、この収税人となって、そういう角度で読んでなければ、これが読めないわけです。

¹⁵イエスがレビの家で食卓に横座してついていると、多くの収税人も罪びとも、イエスや弟子たちと共に横座していた。というのは、多くの人々がそこにいて、イエスに従っていたからである。

「横座」と私がわざわざ訳したのは、向こうではユダヤ人はご飯を食べるときに——これは日本人に言わせれば、あまり行儀がよくないですね——まっすぐ坐ってないで、少し身体が横になって肘をつきながら食べるような、あまりおろしろくない恰好です。動物がそういうように、牛や羊がそういうふうな恰好をして食べるのかなんだか知らないけれども、遊牧の民だから、似ているのかも知れませんね（笑）。とにかく、このギリシャ語はそういう言葉です。

多くの収税人と罪びとがイエスや弟子たちと、そういった恰好でご飯を食べていた。その仲間入りをした。イエスの福音の事態にはよくご馳走のことが出てきます。ここもそういった招きですね。だから、「罪びとの招待」と題した。

●罪びと

「罪びと」という概念は——特に「人」という字を仮名で書いたのは、「罪人^{ざいにん}」なんて読まれては困りますから——パリサイ人^{ひと}たちが使っていたところの一つの用語であるわけです。公然と不道德な生活をする者もその中に入ります。例えば、「罪ある女」というような、ル



カ伝7章に書かれているような「遊女」式な者もその一人であるし、また、「取税人」たちがなぜ嫌われるかという、彼らはローマの官憲の手下になっている雇い人でありまして、ちよつと請負式うけおいなんです。ある規準の税を取り立てて、それ以上に税を取り立てると、それは自分の利益となる。それだから、非常に悪いことをしたらしい。それで、「取税人」というと、みんなに爪弾つまはじきされる者の代名詞になっていたわけです。これはルカ伝6章、19章、マタイ伝5章あたりに出ています。

それからまた、「異邦人」も律法のことをよく知らないし、守らないから、これも罪びとの中に入る。それから、当時はいわゆる戒律宗教ですから、祭司やパリサイ人や学者たちが詳しく規定するところの、また守っているところのユダヤ教の祭儀、またいろんな毎日の、

『ご飯を食べる前には手を洗ってどうのこうの。ある食べ物は食べてはいけない』

とか、いろいろなやかましい規定がたくさんある。それを守らない者たちがやはり罪びとです。だから、宗教的道德的な自己義認者から見て、そういった連中がみなこの「罪びと」です。取税人も非常に金銭上で不当なことを働いていたというのが常識であったので、罪びとと言われていた。

ところが、そういった非常に嫌われた爪弾きされた罪びと——ヘブライ語で言うところ「アム・ハ・アーレツ」「地の民」という言葉です——イエスはそういった人たちのいつも味方といえますか、それを相手としておられた。聖なる人が汚れたる者といつも一緒になっているというようなわけですから、立派な者たち、祭司や学者やパリサイ人から非常に憎まれ敵視されてくるのも当然です。「パリサイ人びと」というのは、「分かれたる者」という特権階級です。自分たちはみんなとは違うんだという、非常に分かれたる——やはり選民意識ですね、イスラエル自身がもともと選民の意識を持っていますが——イスラエル中のイスラエルとと思っているようなご連中がこのパリサイ人です。それから、「ラビ」だとか——坊さんですね——それから、「学者」だとか、これが一つのグループになっている。

16 パリサイ派の学者たちは、イエスが罪びとや取税人と食事を共にしているのを見て、弟子たちに言った『なぜ、あの人は取税人や罪びとたちと食事を共にするのか』

と。汚れた話ではないかと。自分たちはお高くとまっていますから、どうしてもそういった言葉が自然に出てくるわけです。

17 イエスはこれを聞いて彼らに言う『健康な者には、医者是要らない。要るのは病人である。私は義人をではなく、罪びとを招くために来たのである』

と。罪びとを招待するため来たので、義人とは関わりがないんだと。最大の、質的に最も桁違いなこの義人が、

「義人を相手にしないで、罪びとを相手にする」

という。我々は今日、学ぶのは、もちろん言うまでもなく、この17節のイエスの言葉です。



● 罪

旧約聖書で、「罪」ということをくまなくお話ししたら、とても大変です。一番普通の意味としては、「^{まとはず}的外れ」のことが「罪」という言葉の一番普通の意味なんです。的外れていくことです。質的に言いますと——レビ記をいろいろ探ってみなければなりません、大体日本でもそうですけれども——不浄なことです。宗教的な意味ですね、これは旧約では非常に大きな役割を果たしている。祭儀、また宗教的ないろいろな戒律、そういったものを踏み行わないこと、それに背く^{そむ}ことです。不浄な食物を食べてみたり。

「食物に潔からざるものなし」

とキリストは福音書の中でも言っておられるし、それから、使徒行伝の中でペテロに黙示でもって示しておられる。

「神さまの造ったものに潔からざるものなし」

という。食物に——どういう食物は、たとえば魚で鱗のないものは食べてはいかんだとか、ひずめの割れているのがどうか、割れてないのがどうか——いろいろな規則があるわけです。そういった礼拝的な意味の、不浄の食物を食べることが罪であったり、あるいは、死人は不浄なものであるから、死人に触れることは罪であるというような、いろいろなことが書いてある。レビ記の5章あたりを見ると、

「²人もし汚穢^{けがれ}たる獣の死体^{しかばね}、汚穢たる家畜の死体、汚穢たる昆虫の死体など凡て汚穢たる物に触ることあらば、その事に心づかざるもその身は汚れて辜^{つみ}あり。」（レビ5:2）

というようなことが書いてある。そういった宗教上のいろいろな罪に対して、それを潔めるところというところに、いわゆる「罪祭」というものが行われて、そして潔めのことをやるわけです。それはレビ記4章27～31節をご覧になると、はつきり書いてある。

「²⁷また国の民の中に誤りて罪を犯しエホバの誠命^{いましめ}の為すべからざる者の一つを為して罪を獲^とる者あらんに、²⁸もしその罪を犯せしことを覚^{さと}らば牝山羊の全き者を牽^ひきたりその犯せし罪のためにこれを礼物^{そなえもの}になすべし。

これが贖罪^{しよくざい}の意味です。

²⁹即ちその罪祭の牲の首に手を按^おき燔祭^{はんさい}の牲の場にてその罪祭の牲を宰^{ほふ}るべし。³⁰而して祭司は指をもてその血を取り燔祭の壇の角にこれを抹^ぬりその血をことごとくその壇の底下に注ぐべし。³¹祭司また酬恩祭^{しゅうおんさい}の牲より脂をとるごとくにその脂をことごとく取りこれを壇の上に焚^{やき}てエホバに馨^{にほひ}しき香をたてまつるべし。かく祭司かれのために贖罪^{あがなひ}をなすべし。然せば彼は赦^{ゆる}されん。」

（レビ4・27～31）

とある。そういったのが、イスラエルの宗教の質であり型です。罪というものの贖いが、血をもつて、疵^{きず}なき動物の血をもつてなされるということとは所々に書いてあります。また、



さきほど申し上げましたように、戒律を守らない者とか、あるいは無意識でそれを守らなかったとか、祭儀をよくわきまえていないだとか、いろんなことがあるわけです。それを一々当たっていると、大変なことですが。

●神からの離反

しかし、そういった祭儀的な意味における罪というようなことは、それは預言者たちにとっては、第一義の問題ではない。預言者たちにとりましては、人間の実存の問題に食い込んでくるわけです。これは、イエスの宗教は、そういった意味において、預言者の宗教を受け継いだことは実に自明的なことです。

ちよつと、アモス書を開きます。1章から2章にわたって、イスラエルの近隣の国々の罪を、特に首都を指し示して——「東京は何々の罪あり」というのは「日本は何々の罪あり」と同じような言い方で——首都を指して言うわけです。1章3節に、

「エホバかく言いたもう、ダマスコは三つの罪あり四つの罪あれば我かならず之を罰して赦さじ」（アモス1:3）

というようにことで、ずっと同じ調子で、アモスにエホバの言葉が伝えられていく。ダマスコはシリアの都です。6節のガザはペリシテ、ツロはフェニキアの都というような具合に。特に2章6節に来ますと、

「エホバかく言いたもう、イスラエルは三つの罪あり四つの罪あれば我かならず之を罰して赦さじ。即ち彼らは義者^{ただしきもの}を金のために売り、貧者を鞋^{まずしきもの}一足のために売る。彼らは弱き者の頭^{かしら}に地の塵あらんことを喘^{あえ}ぎ求め、柔らかき者の道を曲げ、また父子ともに一人の女子^{おなご}に行きて我が聖名^{きよきな}を汚す。」（アモス2:6～7）

と、いろんな悪いことを忌憚^{きたん}なくあげて、糾弾^{きゅうだん}しているわけです。そして、アモスは何を唱えたかというのと、

「汝ら我に帰れ」

ということですが、

「然^{しか}るに汝らは我に帰らずとエホバ言いたもう」

という言葉が4章に畳みかけて書いてある。

「神からの離反が、離れ反することが罪である。だから、神に立ち帰れ。神との繋^{つな}がりがあるところが即ち義である。神の義というものがそこに立つんだ」

ということが、アモスの預言で非常に力強く言っているところです。これはアモスに限らず全ての預言者が言っている。神との連なりに義というものがあるということは、旧・新約を貫いているところの大事な実存の事態です。

即ち、パウロがローマ書で言っているところの不義とか、不虔^{ふけん}とかはみんな縦の関係が



破れているところに、罪というものがある。人間相互の間のいろいろな道徳的なことうまくいかないこと、それは神との関係の切れているところから、それがいい加減であるところから生じて来るところの事態です。

それは有名な詩篇51篇の言葉を見れば、よく分かります。

「²わが不義をことごとくあらいさり我をわが罪よりきよめたまえ。³われはわが愆^{とが}を^{たが}しる。わが罪はつねにわが前にあり。⁴我はなんじにむかいて独^{ただ}なんじに罪をおかし聖前にあしきことを行えり。されば汝^{ただし}ものいうときは義とせられ、なんじ裁くときは咎^{とが}めなしとせられ給う。」（詩篇51・2～4）

聖旨に対する間違いでありましたが、それは要するに元を尋ねてみれば、ただ汝、神に對して、不信であるということです。マルチン・ルターが『ローマ書の序文』のところで罪のことを語って、

「結局、罪は心の奥底における不信である。これが罪の罪たるものである」という。心の奥底において神に對して信じていない。神に信賴していない。だから、「罪」というものは、

「具体的な神との魂の連なりが切れている」

ことです。具体的に神と魂が連なるということの、その姿はどうかというと、これは従順ということ。また、信賴ということです。

●我執

従順だとか信賴だとかというのは、現代あるいは近代意識にはどうもピンと来ない。すぐ、「自由」というようなことを言つて、「自主でありたい」とする。だから、自主であるということとこれが非常に矛盾してしまうものだから、どうも信仰の世界に入りにくいわけです。この相対的人間が手放しで自主であるということは、必ず逆に自分に囚^こわれることになる。これは我執^{わしよく}ということになる。「私は、私は」というその意識は、それは我執になる。手放^{はな}しの自主は罪なんです。

ルカ伝15章で、放蕩息子が出かけて行つた。即ち、父から離れて、自分は自主独立となろうとした。そこにもう既に罪の根本の姿がある。手放しの自主独立はダメになる。そして、

「父のもとに立ち帰らん」

という。我執になつてしまうから、その手放しの自主はダメなんだ。

仏教の世界でも、「悟り」と言いますけれども、

「宇宙の大霊と一つになる」

ように悟りますますわけです。ということは、生来の自我というものがあったのでは、その悟りの世界には来ない。即ち、この身心から脱落しなければならぬ。脱落するということとは、この自我から、我執から自分を抜け去つて、そして



「大我、宇宙我に即せん」

とする。そのときに、

「本来の我というものに帰る」

と言う。本来の我に帰るときはもはや我執の我ではない。悟りの世界では、どこまでも我執的な我というものは否定されなければ、本来の我にはなれない。我々は神の姿に本質的につくられている。これが知らないまにそれを私して我執になったところに罪がある。

「与えられたる我である」

という、この「与えられたる」ということの自覚がなくなってしまうものだから。その我はいかにして与えられるか。今度は、無我となることです。

「無我となつて、与えられたる我に帰らん」

とする。これは福音の世界です。悟りの世界なら、本来の我に帰らんとする。同じことなんです。同じことだけれども、福音の世界では、超絶の創造者たる神という非常にはつきりした主体を持つている。私たちは、とにかく相対的な存在でありながら、我という人格的主体を持つているんですから。その我という人格的な主体が絶対的な神という主体に自分を没入させたときに初めて、間違つたところの罪なる人格的主体が本当に義なる人格的主体に、霊的な主体に変えられるわけです。

「神の前に自分がいかにダメであるか」

ということの徹底的な自覚が必要です。パウロがローマ書7章で書いているような、

「ああ我、悩める人なるかな。この死の体を……」

と。実はパウロは、自分は義人だと思っていた。

「俺こそはパリサイ中のパリサイで、選ばれたる者、選人である」

という、エリート意識が非常に強い。それで、イエスを信ずる者を迫害していたわけです。ところが、その自己義認はとんでもない罪であり、神さまという主体との交わりなくして、

「俺は神の律法を全うしている」

と言って、こちら側に「俺が」というやつが来ている。忠実でないんです、熱心なんです。その姿それ自身は道徳的な角度からは別に悪くはない。けれども、神を無みして、

「俺は神を拝している」

と言つたら、もう実に皮肉な大きな間違いを犯している。それが分からない。熱心であればあるほど分からない。それでは仕方ない。キリストは非常手段をもって、

「パウロ（パウロ）、パウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と靈撃した。「私が地上で敵としていた者たちは、みんなお前の今の姿で代表されている」と。パリサイ人、祭司、レビ人もサドカイ人もみなそうです。「自分が、自分が」と思っていたパウロはとんでもない。

「今までの自分の義は、塵芥の如くこれを捨てる。俺は間違っていた」



と。驚くべき神の前に自分を「否」としていたキリストは、本当に神において在った。この神を、父を具現していたところのキリスト、そして今、その栄光をもつて現れたキリストの前に、パリサイ的な義が完全に碎かれる。自分で碎かれないものだから、キリストに碎かれてしまった。そして、サウロは

「ああ、私は何と間違いをしていたか」

と気がついた。それで彼は、このキリストの十字架が初めて身にしてみてきた。

身にしてみてる。身にしてみるまではダメですよ、身にしてみなければ。十字架は、身にしてみてるまでは、ダメなんです。福音の世界に入れない。これは誰よりもパウロがはつきりとそのことを示している、証している。

●義人なし一人だになし

イエスは、

「健康な者には医者是要らない」

とおっしゃった。けれども、誰が本当に健康でしようね。私たちは本当に健康であるならば、もう百歳を突破することは何でもない話ですよ。ところが、これが本当に健康でない。健康に見えても、肉体的にも、決して本当に健康でない。けれども、イエスは一応、

「健やかな者には医者是要らない。病人だけが要る」

と言われた。病人は、病んだ自覚があるから、お医者さんの所へ行つて、お医者さんにかかるわけです。

「お前たちは自分たちを義人と、義しいと思っているが、とんでもないまちがいだ。

みんな罪びとだ」

というわけです。そこには憐憫が隠されているとともに、また、非常な審判も隠されている。実は、ローマ書3章にある通り、

「義人なし、一人だになし」

という。罪の問題を知ろうと思つたら、ローマ書に來たらいい。ローマ書3章9節、

「9さらば如何ん、我らの勝る所ありや、有ることなし。我ら既にユダヤ人もギリシヤ人もみな罪の下に在りと告げたり。10録して『義人なし、一人だになし、11聡き者なく、神を求むる者なし。12みな迷いて相共に空しくなれり、善をなす者なし、一人だになし。13彼らの咽は開きたる墓なり、舌には詭計あり、口唇のうちには蝮の毒あり、14その口は詛と苦とに満つ。15その足は血を流すに速し、16破壊と艱難とその道にあり、17彼ら平和の道を知らず。18その眼前に神をおそるる畏なし』とあるが如し。」（ロマ3:9～18）

と。詩篇14篇を引用してパウロはこのように申しました。義人と思つてゐる者は、実義がない。目が開いている者、思っている者は実は目が開いてないと、キリストがヨハネ伝9



章で言っておられる。私たちはまず魂が病んでいる。それで肉体も病んでいる。外側がどんなに、どのように見えても、魂が病んでいるし、肉体は病んでいる。自分はどうもしょうがないと、自分に愛想をつかせ、自分をもてあまして、悲しみに嘆いている。そういう人をキリストは相手にする。

「恵福^{さいわい}なるかな、悲しむ者。その人は慰めを得る」

と。イエスは、人間の本来の姿を、現実の姿をよく見極めておられる。

●根本的な欠陥

文化の世界で、何のかんのと今はいろいろなものがありますよ。精神的なものも、また物質的なものも、我々の心をまた生活をいろいろ慰め、喜ばせ、励ますいろいろなものがあります。けれども、そういうものでもって、とにかく満足している人たちは、福音の世界はあまり関わりはないわけです。けれども、

「どうも、そういったものではどうにもならん」

と言って、何か根本的な欠陥というものに、いろいろな意味においてその根本的なことにでつくわして、根本的な欠陥を感じる人は即ち、

「自分は罪びとである、欠けた者である、どうにもならん者である」

という、この自覚をとにかく持つてきた人は、福音に近いわけです。けれども、

「私は正しい。自分は正しい者である」

と言って自己を肯定し、

「こういうことで大体、自分は満足している」

と言って、文化的な何ものかでもってことが足りている人は、福音の世界になかなか来れない。道徳的に立派な人がなかなか福音に来れなくて、しょうがない欠陥を、いろいろな癖を持つている人が仕方なしに、

「もう、行くところがないから」

と言って、福音に来れるという事態が大いにあるわけです。だから、キリストは、「罪びとを、病人を」と言って、それを相手にしていた。「俺たちは」なんて言っている連中は、キリストは相手にされない。けれども、

「偽善なる、学者、パリサイ人^{びと}よ。お前たちは一番義しいと思つてゐるが、とんでもない。地獄が一番、お前たちに近いんだ」

ということを烈しく、マタイ伝23章で攻撃しておられる。

「¹³禍害^{わざわい}なるかな、偽善なる学者、パリサイ人^{びと}よ、なんじらは人の前に天国を閉ざして、自ら入らず、入らんとする人の入るをも許さぬなり。¹⁵禍害^{わざわい}なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得んために海陸^{うみおか}を経めぐり、既に得れば、之を己に倍したるゲヘナの子となすなり。¹⁶禍害



なるかな、盲目なる手引よ、なんじらは言う「人もし宮を指して誓わば事なし、宮の黄金を指して誓わば果たさざるべからず」と。17 愚かにして盲目なる者よ、黄金と黄金を聖ならしむる宮とはいずれか貴き。云々」（マタイ23・13～16）
といったような具合で、いわゆる祭司的な宗教に対して、キリストは真つ向から戦つておられた。また、23節に行きますと、

「23 禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは薄荷・蒔蘿・クミンの十分の一を納めて、律法の中にて尤も重き公平と憐憫と忠信とを等閑にす。然れど之は行ふべきものなり。而して彼もまた等閑にすべきものならず。」（マタイ23・23）

即ち、人間の本当の実存面がいい加減になつていて、ただ祭儀的な「十分の一を納めたらどうの」なんていうことを問題にしている。

「25 禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは酒杯と皿との外を潔くす。然れど内は貪欲と放縦とにて満つるなり。26 盲目なるパリサイ人よ、汝まず酒杯の内を潔めよ、然らば外も潔くなるべし。」（マタイ23・25～26）

「お前たち自身が杯ではないか。その内側を潔めなさい。問題は心の問題だ。公平と正義を、憐憫を行え」

と、いつも預言者たちが言つてゐる。エレミヤもイザヤもホセアもみんなそうです。

「本当の道義と憐憫の世界、これが本当の宗教である。それは神との連なりから始まるんだ」

ということが預言者の宗教でありました。イエスがその角度から、全然見当違いな当時の戒律宗教に対して、もの凄く反対しておられる。

● 砕けたる魂

しかも、モーセの十誡よりも更にキリストはえぐつて、

「兄弟を憎む者は殺したる者なり」

と言つて、預言者たちが道義の世界を言つたけれども、本当の道義というものはどこいうところにあるかということ、その一番深いところを山上の大告白で論しておられる。それが本当の義なんです。そのような深い――山上の垂訓で畳みかけておつしやつておられる、そのモーセの十誡以上の――実存の世界に照らしたら、みんな落第です。

「お前たちは自分を義人と思つてゐるが、その義はとんでもない義だ。それは偽善の義だ」

と。義であると言つてゐるが、それは偽りだと。

「義人をではなく、罪びとを」

と言ふんだから実は、



「すべてお前たちこそ罪びと中の罪びとなんだ」

ということなんだ、本当は。

私たちの大事なことは、神さまの前に砕けたる魂であること。死に到るまで、砕けたる魂であることが私たちの本当の義なんです。

「我々の本当の義は何かというと、砕けたる魂である」

ということなんです。何か「義しい者である」ということではない。我々は神さまの前に本当に砕けたる魂であるということなんです。何となれば、一番砕けた魂は、イエス・キリストが砕けた魂であつたからです。キリストは神の前に本当に砕けたる魂であつた。自分を何ものともしていない。「何ものともしていない」ということは、何かとりすましているということではない。本当に神の前に平伏した砕けたる魂。イエス自身が砕けたる魂です。

「私自身が一切の罪を、罪びとの罪を背負つて、罪びとの首となつて、十字架に架かる」

と。これ以上の世界はないわけです。

罪びとを招かれる。罪びとを招待して、ご馳走を食べさせる。このご馳走の内容は即ち、このキリストの義である。

「我、罪びとを招かんとて来れり」

とは、「私たちはキリストに招かれた」と言つて、いい気になつていてのではない。そうしたらば、イエスの義が、イエスの驚くべき神におけるところの実存が、聖霊が砕けたる魂に臨んでくる。聖霊は砕けたる魂に宿る。

「私はただしい」

と言つて、人と比較しているうちは絶対に聖霊は宿つてこない。砕けたる魂、誠に申し訳ないという、この魂にいつでもキリストは、「よしつ」と、絶対恩寵をもつて赦し、そしてそこに宿つてくださる。そこで私たちは、本当にそれが恩寵であり、行き詰まりを知らず、いよいよ展開していくということを知るわけです。

●聖霊のご馳走

我々の肉体は弱い。けれども、この欠陥だらけの肉体の奥に、健やかなる霊体が、そのような砕けたる魂の、聖霊の宿るところに霊体が形成されていく。聖霊の宿る衣は即ち霊体です。

「聖き衣を着させられたる者」

というような表現で言われたりする。

相対的な義人なんてものは問題でない。キリストという絶対的な義が、その内容は聖霊が示しているところの具体的な世界です。

「公平を愛し、憐憫に生きる」



と預言者たちが言っている事態がこの罪びとの中に形成される。罪びとという自覚が何か消極的な暗い自覚ではなくして、新しき創造の明るい自覚として、逆説的に受けとられていく。そのときに、

「私たちは罪びとである」

という自覚が、何か展開を知らないような、ただ消極的に妙な限定されたようなことではなくして、何ものでもないという人に、そして、キリストの義と愛をして、いよいよ質的に潔められていくところの、そういった人にされてくるんです。

「キリストが招く」というのは、招いて、それつきりではない。ご馳走を食べさせられる。そのご馳走の内容は、キリストの義であり、愛であり、聖霊の持つていらっしゃるところの実質です。罪びとの招待というのは、私たち罪びとが招かれて義人されるところの招待です。いよいよキリストの義をいただくところの招待である。福音である。それが即ち、福音の音信です。そうして初めて、

「自分たちは義人である、病人ではない。健やかなる者である」

と言って、手放している者たちは、逆にダメになる。これは事実が証明している。イエスをその角度から受けとった人たちは、どしどし本当の義人とされていく。

また、直^{じか}々のイエスにいきなりいろいろな病を癒された連中は――キリストが驚くべき^{あわれみ}憐憫をもつて具体的に神の国の祝福の徴としてなさったんですが――それをただ現象的に受けとったご連中は、本当の恵まれた世界に入ることができなかった。だから、福音における罪という事態がどのようなことであるか。どこまでも、問題は中心問題に、魂の問題にかかってくるので、ただ肉体が癒されたの癒されなかったのと、そんなことではない。

どうか、その意味において、我々はこの地上における相対的な現象の奥に、根源現象が展開していくような、いつどこで仆れても本当にその人はやがて満月とされていくところの、健全な構造を魂において持ち、霊体をいただいているという、そういう角度の福音の証し人と私たちはなつていきたいと切に願う次第です。

お互いさま、いろいろな癖のあるしょうがない者です。けれども、どうか、そういうことは常に乗れ越えて、真に砕けたる魂に植えつけられるところの、聖霊の内住という具体的な恵みを受けて、いよいよ、皆さんは進んでいただきたいと思えます。我々は今こそ、群は小さいけれども、そのような福音であることの証し人として、証人として、決して安易なことであつてはならない。どうか、その意味で、私たちは一回一回、この集会をしてますから、そういった行き詰まりを来たしている人、何か求めている人、そういう人を、

「来たりて見よ」

というわけで、キリストの招待にあずかるように、集会に連れて来てください。

